



TITLE:

[書評]L'Encyclopédie de Diderot et d'Alembert : CD-ROM Redon, 1999

AUTHOR(S):

小関, 武史

---

CITATION:

小関, 武史. [書評]L'Encyclopédie de Diderot et d'Alembert : CD-ROM Redon, 1999. 仏文研究 2000, 31: 127-132

ISSUE DATE:

2000-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137902>

RIGHT:

〈書 評〉

*L'Encyclopédie de Diderot et d'Alembert : CD-ROM*

Redon, 1999.

小 関 武 史

1998年6月5日、パリの Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales において、「*L'Encyclopédie. Du réseau au livre et du livre au réseau.*」と題する小シンポジウムが催された。午後の部では、ロジェ・シャルチエ、ジャン＝クロード・ボネ、ベアトリス・ディディエ、ジャック・ブルースト、プロニスラフ・パチコといった面々が、それぞれの立場から『百科全書』に関わる自身の最近の研究成果を発表した。いずれも興味深いものであったが、それらに劣らず注目を集めたのは、午前中にシカゴ大学のグループが行ったインターネット版『百科全書』の紹介と実演である。

以前より、シカゴ大学では INaLF と共同で、フランス語で書かれたテキストを電子化することを目的とした ARTFL Project (Project for American and French Research on the Treasury of the French Language) を推進している。『百科全書』の電子テキスト化はその一環として進められた事業で、早くから第一巻についてのみ、インターネット上で公開されていた。パリで開かれた小シンポジウムは、内部での検討が一通り終わり、秋にはテキスト全体を提供できる目処が立ったのを受けて、企画されたものであった。

インターネット版の『百科全書』では、本文のテキストファイルとともに、全部のページを図像ファイルにしたものが用意されていた。機械的に行う読み取り作業の精度はあまり高くなく、はっきりしない箇所は *φ* という記号で処理されている。他にも、s の古い活字が f と見分けがつきにくいことによる混乱が散見するが、現物の図像ファイルが用意されていれば、自分の目で確認することが可能である。項目の切れ目については、後に CD-ROM 版の『百科全書』について触れるのと同じ問題を抱えていたが、全体として見れば、利用者にとって使いやすいようにできていたと思う。デモ版として第一巻を自由に閲覧できたのはすでに過去の話になったようで、現在は登録者でなければ利用できない。シカゴ大学のサービスは北米に限定されており、それ以外の地域に住む人は、INaLF のホームページ (<http://www.inalf.cnrs.fr/>) から登録を申し込むことになる。年額2000フラン(税抜き)で、FRANTEXT の全体を利用できる。

さて、私はシンポジウム会場で実演を見ながら、インターネットで『百科全書』が読めるのも結構だが、これが CD-ROM になればもっといいのに、と切実に思った。同じ思いの人は多くいたようで、質疑応答では真っ先に CD-ROM 化の予定が問われた。その予定はない、とシカゴ大学の責任者は言い切った。『百科全書』を調べる必要があるのはほぼ研究者に限られるので、大

学などの研究機関を介した有料登録が最も妥当な形態だ、という説明であった。しかし、本当にそうだろうか。ある問題について『百科全書』ではどのように書かれているかとりあえず見てみたい、という潜在的な要望は、相当にあるのではなかろうか。釈然としないものを抱えながらも、元締めシカゴ大学が予定はないと言う以上、CD-ROM化はありえないものと思っていた。

ところが、全く別の方面からCD-ROM版の『百科全書』が売り出されたのである。手がけたのはRedon社で、ここからはリトレやアカデミーの辞典などもCD-ROMで提供されている。『百科全書』について言うと、今のところ一般に売り出されているのはウィンドウズ版のみであり、マッキントッシュ版は出ていない。Redon社のホームページ (<http://www.dictionnaires-france.com/>) から『百科全書』のページに飛ぶと、マッキントッシュ版が2000年3月に出ることになっているが、予想通りと言うべきか、いつまで経っても予告のままで、実際に出た様子がない。本誌が発行される秋には発売されていることを祈るばかりである。私のようにマッキントッシュからパソコンに入った者にとっては不便な状態が続くが、この手の事典類の中には最初からウィンドウズ版しか用意されていないものもあり、事典用にウィンドウズ機を導入するのも一つの手であろう。

そういうわけで、私は現在マッキントッシュとウィンドウズを併用しているのだが、ウィンドウズ版のCD-ROMを手に入れたからといって、すぐに利用できるわけではない。『百科全書』のCD-ROMは、フランス語版もしくは英語版のWindows 95以降のシステムでないと読み込めないのである（Windows NTも可）。かろうじてWindows 2000になって、日本語版でも読めるようになった。ただし、コントロールパネルを開いてシステム言語をいちいち英語またはフランス語に変えてやる必要がある。その間日本語の入力に支障が出るので、実に厄介である。

『百科全書』は、本体17巻、本体の図版11巻、補遺4巻、補遺の図版1巻、索引2巻の合計35巻から成る。この全体が、四枚のCD-ROMに収められている。文章は最初の一枚にまとめられ、図版が残りの三枚に分けられている。とはいえ、一枚目のディスクで図版を表示させることも可能であり、大抵のことは一枚で済むように工夫されている。

事典を通読する人は少なからう。目的の項目を読み、場合によっては関連のある項目を検索するというのが、ごく一般的な事典の利用法であろう。普通の本ならページずつめくって行けばよいのであるが、事典の場合はあちこちを飛び回らなければならない。紙に印刷された事典だと、目的の箇所到達するまでが一苦勞である。その点、電子テキストなら無駄なく目的地に辿り着ける。見出し語以外の本文中の単語から検索することも可能である。CD-ROM版『百科全書』では、見出し語と本文中の単語の外に、執筆者や項目の学問分野からも検索をかけられる。順番に紹介しよう。

まず、見出し語が分かっているなら、これを手がかりにするのが最も簡単である。画面左側に項目をアルファベット順に表示するウィンドウがあり、ここに目指す項目の見出しが現れる。普通の黒字が『百科全書』本体の項目、灰色が補遺の項目、灰色の斜体が索引の項目である。見出し語をクリックすれば、右側の大きなウィンドウに本文が表示される。項目一覧はアルファベット順に表示されているので、スクロールしながら目的の項目に辿り着くこともできる。

次に、ある主題に関して『百科全書』がどのようなことを述べているかを知りたいければ、plein-texte という画面にしてからキーワードを打ち込むことによって、その単語を含む項目をすべて一覧表示できる。もちろん、複数のキーワードを用いた検索も可能である。項目の見出しをクリックして本文を出すところは、見出し語検索のときと同じである。

執筆者や学問分野をもとに検索する方法もあるが、これはあくまでも補助手段と考えた方がよい。執筆者をめぐる問題については後述するとして、学問分野はあまりにも細分化されていて、大して役に立たないのである。

実際に使ってみると、あまりにも簡単に調べがつくので、拍子抜けするほどである。これまで眼を皿にして『百科全書』を一ページずつめくっていたのが馬鹿らしくなる。何巻にも達する大型の事典がCD一枚に収まるという物理的效果も無視できない。ノート型パソコンにインストールすれば、持ち歩くことだってできる。必要な部分をワープロソフトに貼りつけて加工するのも意のままだ。

ただし、よいことづくめではない。CD-ROM版『百科全書』にも問題がいろいろとある。たとえば、底本が初版とは見なせないこと、研究にとっては重要な意味を持つ本文以外の要素がほとんど取り込まれていないこと、項目執筆者に関する情報に漏れが散見すること、下位項目(sous-entrées)の扱いが必ずしも適切でないこと、などである。以下にこれらの点について検討を加える。

最大の問題は版本に関わる。このCD-ROMは édition originale in-folio de Paris を底本としたということだが、パリ版と呼ばれるものの中には少なくとも五つの異本があるのである。『百科全書』第一巻は1751年6月28日(7月1日という証言もある)に出たが、発行部数は2050に限られていた。第二巻の準備が進められている最中に、ル・ブルトンを中心とする出版者連合は1100部の増刷を決定する。新しく刷られた版は、第一巻全体と第二巻の途中までが、初版とは異なっている。1752年の早い時期に出版されたものと思われる。さらに、第三巻が1753年10月に発行されて数箇月後の1754年2月6日、出版者連合は第一巻から第三巻までをそれぞれさらに1100部増刷することを決めており、このときも手直しが加えられている。第四巻以降は発行部数も安定し、版元による増刷は行われない。以上を整理すると、版元が直接関わったものだけで、最初の三巻については三つの版が存在することになる。シュワブに倣い、これらを1751年版、1752年版、1754年版と呼ぶことにしよう<sup>1)</sup>。この外に、Riverside 海賊版と呼ばれるもの、一般にジュネーヴ版として知られているものが、主として1754年版に似せて作られている。それらの異同は目立ちにくく、本文については気にするほどの差もないのだが、アステリスクの有無には相当な違いがある。アステリスクはディドロがその項目を書いたという印であり、この情報は『百科全書』研究にとって極めて重要な意味を持つ。様々な要素を勘案すると、真の初版である1751年版が最良であり、復刻版はこれを元にするのが望ましい。

さて、CD-ROM版『百科全書』をつぶさに検討してみると、1752年版と同じ部分が多い。しかし、時に1751年版と一致し、稀には1754年版にしかない特徴も備えている。こうなると、どれが底本か断定しにくい。そもそも正確に写し取ったのかという疑問も湧く。確実に言えることは、

この CD-ROM が1751年版の忠実な復刻ではないということである。内容の理解には支障を来さないが、一部の項目について筆者の特定に問題が生ずる。ディドロが最初の三巻に寄稿した項目の数を、この CD-ROM を用いて正確に計算することはできない。

ジュネーヴ版を含め、パリで発行されたことになっている版本を区別するには、実は本文以外の情報が役に立つ。たとえば、ジュネーヴ版を見分ける簡単な方法は、扉ページに記された表題にアクサン記号があるかどうかを確かめることである。パリ原版では *SOCIÉTÉ* も *MATHÉMATIQUE* もアクサン付きであるが、ジュネーヴ版だとこれが *SOCIÉTÉ* および *MATHEMATIQUE* となっている。外にも、第一巻の最終ページが原版では正しく914となっているのに、ジュネーヴ版では714と間違っていると、ジュネーヴ版第一巻にはエラータがないとか、目に付きやすい違いがある。ところが、この CD-ROM は、そのような本文以外の情報を取り込んでいないのである。これが第二の重要な問題である。本文以外のローマ数字でページが振られた部分は、序論を含んだ第一巻を除き、ことごとく欠落している。編集者による *AVERTISSEMENT*、モンテスキューやデュマルセに捧げられた *ELOGE* など、『百科全書』の思想史的意味を考えるうえで重要な文章が抜けているのである。もしかするとどこかに隠れていたのかもしれないが、少なくとも普通に検索をかけている限り、それらの文章は姿を見せない。ダランベールによる序論は特別扱いで、Aide メニューから直接呼び出せるようになっているが、ダルジャンソン伯爵への献呈辞などもこの中にひっそりと紛れ込んでいた。

利用者にとって実際上の不便と感じられるのは、見つけ出した項目が第何巻の何ページにあるのか、全く分からないことであろう。これは実に不親切だと思う。インターネット版のように左右の *colonne* の切れ目までテキスト中に表示せよとは言わないが、ページの区切りくらいは示すべきである。論文で引用するには、紙の『百科全書』で所在を確認しなければならない。その際、どの巻から調べればよいかも余計な手間を取らされる。研究論文で『百科全書』のページだけが示されているような場合も、その情報を手がかりに本文を呼び出すことができない。

CD-ROM 版『百科全書』の抱える難点の第三は、執筆者に関する情報が雑なことである。『百科全書』では、執筆者の名前は略号で示される。ダランベールは (O)、ドルバックは (-) といった具合である。CD-ROM の製作者は、どの略号が誰を示すかをふまえて、予備知識がなくても *d'Alembert* や *d'Holbach* といった名前から検索できるように配慮している。しかし、『百科全書』における執筆者の指示は一貫しておらず、項目の前後に置かれた編集者による注の中で執筆者の名前が明示されていることがある。これは本文を注意して読んでいないと見落とす恐れがあり、CD-ROM 版ではそこまで目が行き届いていないようだ。その結果、いくつかの重要項目が、執筆者名からは辿り着けなくなっている。ド・プラド神父は『百科全書』の歴史にとって重要な人物であるが、実際に彼が寄稿した項目は一つしかない。それは第二巻に収録された \**CERTITUDE* であるが、執筆者一覧にド・プラド神父の名前はない。見出し語にアステリクスが添えられていることから分かるように、書き出しの一ページはディドロによる。その前置きを読めば、十五ページに達する項目の中核部分がド・プラド神父の手になることは明記されているのであるが、CD-ROM では全体がディドロ執筆扱いのままである。

そもそも執筆者の問題は非常に複雑で、膨大な数の無署名項目が誰によって書かれたかを特定することは、『百科全書』研究にとっての大きな課題となっている。これまでの研究によって、一部については執筆者が判明しているが、そうした成果はこの CD-ROM には取り入れられていない。もっとも、余計な情報を付け加えないというのも誠実な態度と言えよう。重要なのは、無署名項目に出会ったら慎重に対処することである。

項目の区切りについても複雑な問題がある。一つの項目の筆者が途中で変わっているような例があるからである。先に示した \*CERTITUDE などはまだ単純な方で、第七巻所収の GOÛT などに至っては、五つの部分に分かれている。ヴォルテールが項目を書き出し、ダランベールが編集者としての注を挟み、モンテスキューの議論が後を受け、ディドロの短い賛辞を経て、もう一度ダランベールが締め括りの考察を展開している。この間、一度も見出し語は変わっていない。しかも、GOÛT を見出し語にした項目はこれ一つではない。ブロンデルによる建築における趣味を扱った GOÛT や、ルソーによる GOÛT DU CHANT などが後に続いている。CD-ROM 版『百科全書』では、見出し語一覧のウィンドウに表示されるのは親見出しだけで（この場合で言えば GOÛT のみ）、この親見出しをクリックすると sous-entrées と称されるものが全部まとめて同一ウィンドウに表示されてしまう。一応 sous-entrées 間を移動するためのボタンが用意されているが、同一見出し語内部では区切りのつけ方が甘いため、見過ごす危険がある。

気がついたことをもう少し列挙しておこう。

正書法が確立していなかったために、同じ単語でも綴りが一定していない場合がある。たとえば complete と completee という二種類の綴りは、CD-ROM 編集者によって数の多い後者に統一されている。検索の便を図るためである。こうした補正は無原則に行われているのではなく、temps が tems に統一されているような事例については、元の綴りが残されている。版元が補正された単語の一覧を用意しているので、必要があれば請求するとよい。

ローマ・アルファベット以外の文字は断りなく削除されている。ディドロによる重要項目 \*ENCYCLOPÉDIE は語源の分析から始まっているが、ギリシア語の部分は CD-ROM には取り込まれていない。また、本文中の表なども欠落している。たとえば、項目 FUSÉE では火薬の成分表が重要な意味を持っているが、これらの表が見当たらないのである。

さて、専門的な立場から殊更に問題点をいくつか指摘してみたが、全体としてみれば『百科全書』が電子テキスト化されたことの意義は極めて大きい。先ほど、項目 \*CERTITUDE がド・ブラド神父のものとして扱われていないことを指摘したが、神父への言及が『百科全書』全体でどの程度あるかを調べるには、Prades で全文検索をかけるだけでよい。たちどころに ALUN, CERTITUDE, CHRONOLOGIE, PRADES の四項目が候補として挙がる。このうち ALUN と PRADES に登場するのは地名であって、神父への言及があるのは、CERTITUDE と CHRONOLOGIE の二つである。ディドロを初めとする百科全書派の人々がド・ブラド事件に関わることを避けたことも、このように簡単に確認できる。これを紙の『百科全書』で調べるとなると、絶望的な手間がかかる。また、紙の『百科全書』が手許にあったとしても、それがバリ原版である保証は皆無である。大抵のリプリントは1751年版とは言えない。紙だからといって安

心はできないのである。費用の面でも、CD-ROM 版『百科全書』が二万円以内で買えるのに対して、現在最も入手しやすいリプリント版であるシュトゥットガルトの Bad Cannstatt および F. Frommann から出ている1988年発行のものは、全35巻を揃えると百万円を越す。

したがって、CD-ROM 版『百科全書』の難点を心得たうえで、何らかの補助手段を活用するのが賢明である。私がお勧めしたいのは、シュワブによる『百科全書』の目録である<sup>2)</sup>。これは『百科全書』のすべての要素に巻ごとの通し番号をつけたもので、分割可能な単位はすべて分割してある。先ほどの GOÛT なら、別見出しの項目から分けられているのはもちろんのこと、同一見出し内部も執筆者の交替に合わせて五つに区別されている。第七巻2384番の GOÛT といえはヴォルテールの書いた項目（の一部）で、同じく2386番なら *Essai sur le goût dans les choses de la nature & de l'art* と題されたモンテスキューの執筆部分だといったことが、簡単に分かるのである。CD-ROM 上でシュワブの通し番号から検索をかけられれば、それがいちばんよかったのだが、この目録の素晴らしさは一般には認知されていないようである。

結論めいたことを言うとなると、CD-ROM 版『百科全書』は確かに便利で、内容を把握するだけなら問題はないが、論文で引用するときなどに若干の問題があり、紙の『百科全書』やシュワブの目録などで確認するのが無難である、ということになろう。もちろん、所属の研究機関から FRANTEXT を利用できるなら、それに越したことはない。

## 注

- 1) Richard N. Schwab, « Introduction », *Inventory of Diderot's Encyclopedie*, in *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, t. 80, Genève, Institut et Musée Voltaire, 1971. 特に第九章 « Editions bearing the Paris-Neuchastel imprint » を参照のこと。
- 2) Richard N. Schwab, *Inventory of Diderot's Encyclopedie*, in *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, t. 80, 83, 85, 91, 92, 93, Genève, Institut et Musée Voltaire, 1971-1972. 第一巻は注1)でも触れたように序論に当てられている。第二巻から第五巻までが目録で、第六巻では執筆者ごとにどの項目を書いたかが通し番号によって示されている。無署名項目に関する研究成果も取り入れられている。